

# ベランダバードウォッチ 2008 年冬期結果報告

NPO 法人バードリサーチ・日本野鳥の会栃木県支部

今冬は、全国的に記録的な暖冬とのこと。北海道の友人によると、札幌市付近では例年になくヒヨドリが多く越冬したとのこと。ベランダバードウォッチは、このような暖冬による鳥たちの変化を把握できたのでしょうか。以下に 2008 年 10 月から 2009 年 2 月末までの調査結果を報告するとともに、過去の様子を振り返ってみました。

## 調査地および記録状況

今冬は、合計 58 名の方によって、家の周りの調査および家での調査がそれぞれ 37 か所ずつ行なわれました。調査地は、東北地方から九州・沖縄地方まで広い範囲にわたっていましたが、そのうち関東地方が最も多くそれぞれ 22 か所と 15 か所でした(図 1)。ほかの地域は 1～5 か所と少なく、特に中国・四国地方は両調査を合わせて 1 か所だけでした。

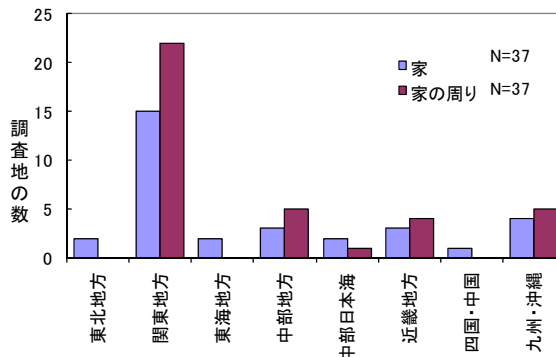


図 1. 2008 年冬の地域別調査地数

記録種数は、家の周りの調査が 103 種、家での調査が 63 種、合計 106 種でした(表 1)。昨冬の種数が 90 種と 47 種でしたので、今冬は昨年より多くの種が記録されました。おそらく、調査地数が昨年よりやや増加したことが主な理由と思われる。一方、家の周りの調査のほうが家での調査より種数が多かったのは、昨年までと同じでした。これは、家の周りの調査のほうが、調査範囲が広いことと調査期間が 10 月から 2 月末までと長いため、水辺性の種や夏鳥、旅鳥も記録されたためです。

## 家の周りの調査

家の周りの調査は、10 日ごとに観察した種と大まかな個体数を記録します。冬の調査では、記録される鳥の種数や個体数は夏の調査より年によって変動が大きく、その年の特徴が顕著に現れます。そこで、冬鳥や国内を季節的に移動する種を対象に、記録率を過去 3 年間の結果と比較してみました(図 2)。

まず、ジョウビタキは、今年も 10 月中旬から記録され、その後の記録率の変化は 2007 年の冬と大変似ていました。しかし、今冬は 11 月下旬から 1 月下旬にかけて過去 3 年より記録率が高い傾向にありました。ツグミは、10 月下旬から記録されたものの、記録率が增加するのは 11 月上旬になってからです。渡来当初の記録率の変化は、2006 年の冬に近

表1. 2008年冬期における家での調査と家の周りの調査の記録種一覧

No. 記録種	家	まわり	No. 記録種	家	まわり	No. 記録種	家	まわり	No. 記録種	家	まわり
1 カイツブリ	○	○	28 オオバン		○	55 ビンズイ	○	○	81 メジロ	○	○
2 カワウ	○	○	29 イカルチドリ		○	56 タヒバリ		○	82 ホオジロ	○	○
3 ゴイサギ	○	○	30 ケリ	○	○	57 ヒヨドリ	○	○	83 カシラダカ	○	○
4 ダイサギ		○	31 タゲリ		○	58 モズ	○	○	84 ミヤマホオジロ		○
5 チウサギ		○	32 クサシギ		○	59 ルリビタキ	○	○	85 アオジ	○	○
6 コサギ	○	○	33 イノシギ		○	60 ジョウビタキ	○	○	86 クロジ		○
7 アオサギ	○	○	34 タシギ		○	61 ノビタキ		○	87 オオジュリン		○
8 オオハクチョウ	○		35 ユリカモメ	○	○	62 イノヒヨドリ		○	88 アトリ	○	○
9 マガモ		○	36 セグロカモメ		○	63 トラツグミ		○	89 カワラヒワ	○	○
10 カルガモ	○	○	37 オオセグロカモメ		○	64 アカハラ	○	○	90 マヒワ		○
11 コガモ		○	38 カモメ		○	65 シロハラ	○	○	91 ベニマシコ	○	○
12 ヒドリガモ	○	○	39 ウミネコ		○	66 マミチャジナイ		○	92 ウソ	○	○
13 オナガガモ	○	○	40 キジバト	○	○	67 ツグミ	○	○	93 イカル	○	○
14 ハシビロガモ	○	○	41 アオバト		○	68 ウグイス	○	○	94 シメ	○	○
15 ホシハジロ	○	○	42 フクロウ		○	69 メボソムシクイ		○	95 スズメ	○	○
16 キンクロハジロ	○	○	43 ヒメアマツバメ	○	○	70 キクイタダキ		○	96 ムクドリ	○	○
17 ミサゴ	○	○	44 ヤマセミ		○	71 キビタキ		○	97 カケス	○	○
18 トビ	○	○	45 カワセミ	○	○	72 ムギマキ		○	98 オナガ	○	○
19 オオタカ	○	○	46 アオゲラ		○	73 オジロビタキ		○	99 カササギ		○
20 ツミ		○	47 アカゲラ	○	○	74 エゾビタキ		○	100 ミヤマガラス		○
21 ハイタカ	○	○	48 コゲラ	○	○	75 コサメビタキ		○	101 ハシボソガラス	○	○
22 ノスリ	○	○	49 ヒバリ	○	○	76 エナガ	○	○	102 ハシトガラス	○	○
23 ハヤブサ	○	○	50 ツバメ	○	○	77 ヒガラ		○	103 コジュケイ	○	○
24 チョウゲンボウ	○	○	51 イワツバメ	○	○	78 ヤマガラ	○	○	104 ドバト	○	○
25 キジ	○	○	52 キセキレイ	○	○	79 シジュウカラ	○	○	105 ホンセイインコ	○	○
26 クイナ		○	53 ハクセキレイ	○	○	80 ゴジュウカラ	○	○	106 ガビチョウ	○	○
27 バン		○	54 セグロセキレイ	○	○	81 メジロ	○	○	合計種数	62	103

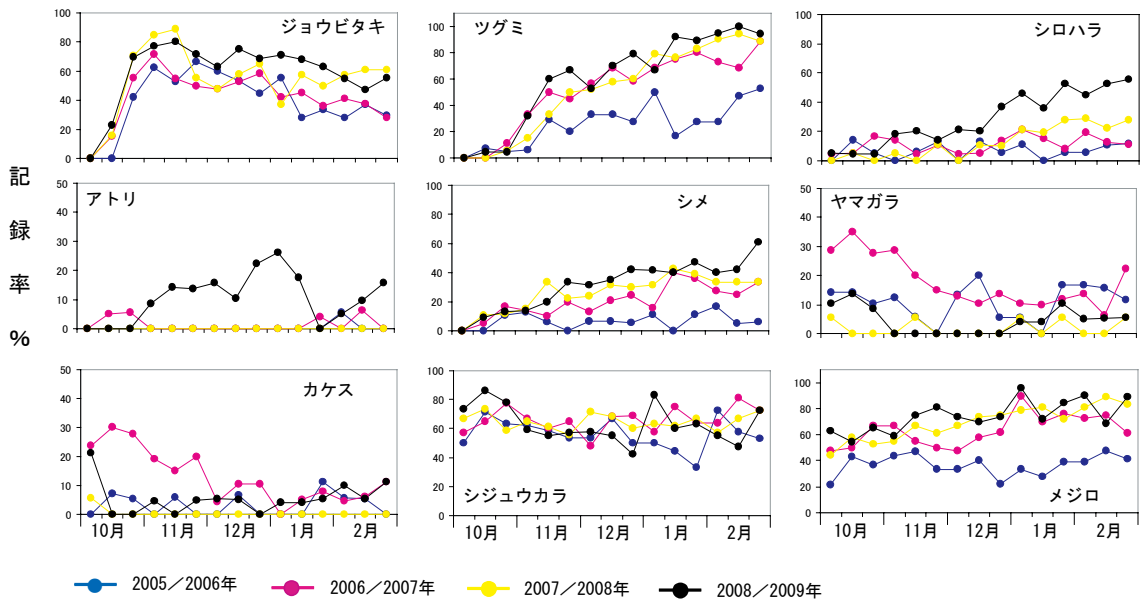


図2. 家の周りの調査における主な種の記録率の変動

く、その後は徐々に増加することで2007年の冬に似ていました。そして、記録率が段階的に増加しました。天候などによって何回かに分かれて里地へ降りてきたのでしょうか。

シメは、渡来当初の記録率の傾向は2007年の冬とほとんど同じでしたが、11月中旬ごろから急激に高くなり、昨年より記録率が高く推移しました。特に2月下旬に急激に高くなりました。食物をもとめて人家付近へやって来たのかもしれませんが。シメと似た記録率を示したのはシロハラです。シロハラも過去3年と比較すると、今冬は記録率が高い傾向にありました。さらに、バードリサーチが別に実施している冬鳥ウォッチでも著しく渡来数が多く報告されたアトリは、ベランダバードウォッチでも例年になく多く記録されました。アトリは、ツグミやジョウビタキなどの常連の冬鳥に比べると記録率こそ低いものの、それでも今冬は最高26%を記録し、しかも冬中記録されました。2005年と2006年では秋口と2月に記録されただけだったのと比べると、大きな違いです。

一方、2006年の冬期に記録率が高かったカケスとヤマガラは、どちらも昨冬よりは記録率が高かったものの、2006年に比べると著しく記録率が低いことがわかりました。改めて2006年の冬のこれらの種の人里への進出の多さがわかります。

シジュウカラやメジロは、多少ばらつきがありますが、多くの年であまり違いがありませんでした。ただ、シジュウカラでは、11月から1月にかけての記録率が過去3年間に比べるとやや低い傾向がありました。一方、メジロは、全体的に過去3年間より記録率が高めでした。

ところで、ヒヨドリやカラス類など住宅地周辺に多い種は記録率ではあまり変化がみてとれません。そこで、個体数ランクをもとにハシブトガラスとヒヨドリ、スズメの経年的な変動を比較してみました(図3)。まず、ハシブトガラスの個体数ランクは、4年間であまり変動がありませんでした。ただし、今冬は11月上旬に減少が見られました。一方、ヒヨドリでは、今冬は過去3年間と比較するとやや個体数ランクが高いレベルで推移しました。今冬は真冬にも明石海峡を群れで渡るヒヨドリが観察された(渡辺美郎氏私信)とのことですので、ともすると暖冬で本州に留まる個体数が多かったのかもしれませんが。スズメも2005年の冬を除くと、多少ばらつきはありますが、大きな違いはありませんでした。

個体数ランク

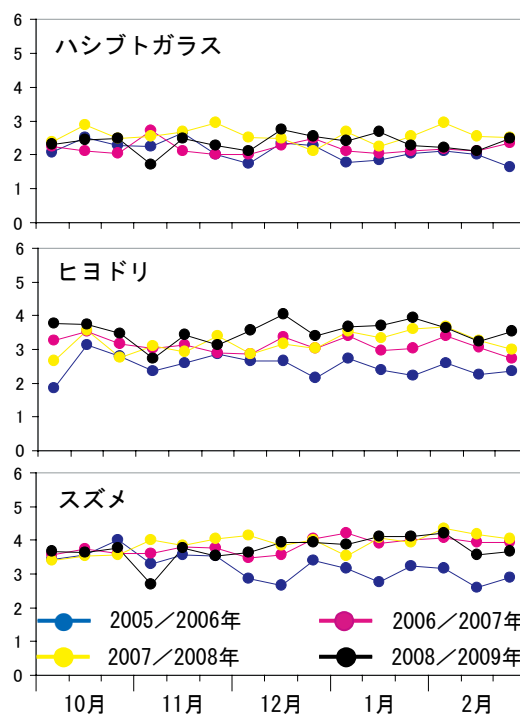


図3. 家の周りの調査における主要3種の平均個体数ランクの変動。個体数は6段階で記録した。

表2. 家での調査における記録率上位10種の比較

NO.	2005/2006冬		2006/2007冬		2007/2008冬		2008/2009冬	
1	スズメ	75.3	スズメ	85.0	ヒヨドリ	96.4	ヒヨドリ	96.9
2	ヒヨドリ	71.9	ヒヨドリ	83.3	スズメ	86.4	スズメ	82.6
3	ムクドリ	54.8	ムクドリ	57.5	メジロ	68.6	メジロ	63.4
4	ハシボソガラス	52.1	メジロ	55.8	ハシボソガラス	60.0	キジバト	55.9
5	ハシボソガラス	47.9	ハシボソガラス	52.5	キジバト	54.3	ツグミ	54.0
6	キジバト	39.7	キジバト	49.2	ムクドリ	54.3	ハシボソガラス	50.9
7	シジュウカラ	36.3	ハシボソガラス	49.2	ツグミ	45.7	ムクドリ	47.2
8	ハクセキレイ	32.2	ツグミ	41.7	シジュウカラ	38.6	ハシボソガラス	42.9
9	メジロ	25.3	シジュウカラ	39.2	ハクセキレイ	34.3	シジュウカラ	41.0
10	ジョウビタキ	20.5	ハクセキレイ	33.3	ハシボソガラス	31.4	ハクセキレイ	34.8

記録率(%)は、記録回数の合計を全調査回数の合計で割って100を掛けて算出した。

### 家での調査

家での調査における記録率上位10種を表2に示しました。10位以内に入る種は、多少順位が異なるものの、4年間でほぼ同じでした。特に、2006年以降はヒヨドリ、スズメ、メジロ、キジバト、ツグミ、ハシボソガラス、ムクドリ、ハシボソガラス、シジュウカラ、ハクセキレイの10種でした。したがって、この10種が冬期の日本の住宅地を代表する鳥たちと言えるでしょう。面白いことに、スズメとヒヨドリの順位は4年間1位と2位を占めてきましたが、2007年からは入れ替わっています。また、メジロやツグミの記録率が次第に高くなってきた一方で、ムクドリの記録率が下がってきました。これが、年による調査地の違いによるものか、それとも住宅地を利用する鳥たちの構成が変わりつつあるのか、今後の調査結果が待たれます。

次に、住宅地の冬鳥や最近記録率が変わってきた種の4年間の記録率を比べてみました(図4)。家の周りの調査で記録率が高かったシメは、家での調査でも今冬は記録率が著しく高いことがわかりました。ツグミやメジロの記録率も徐々に高くなりつつあります。一方、シジュウカラやジョウビタキは4年間であまり大きな違いはありませんでした。

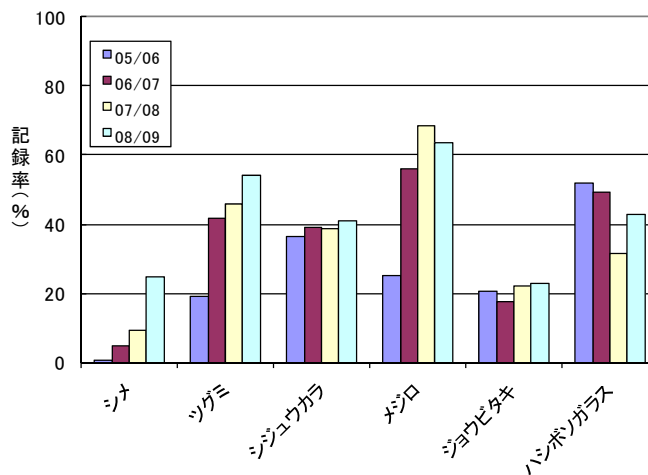


図4. 家での調査における主要な種の記録率の経年変化。記録率は、各種の全調査回数に基づく割合で表している。



さらに、家での調査による記録個体数の変化を見てみます。家での調査の記録範囲は調査地によって多少異なっています。そこで、4年間の個体数の推移をみるにあたって、まず4年間継続して調査された11か所の調査地を対象に調査地1か所あたりの平均個体数を用いて比べてみました(図5)。シジュウカラは、2005年から3年間減少したあと今冬では増加しました。家の周りの調査で今冬の個体数ランクが高かったヒヨドリは、家の調査地でもやや増加していました。スズメは、前述のように2005年の家の周りの個体数ランクが低い傾向にあり

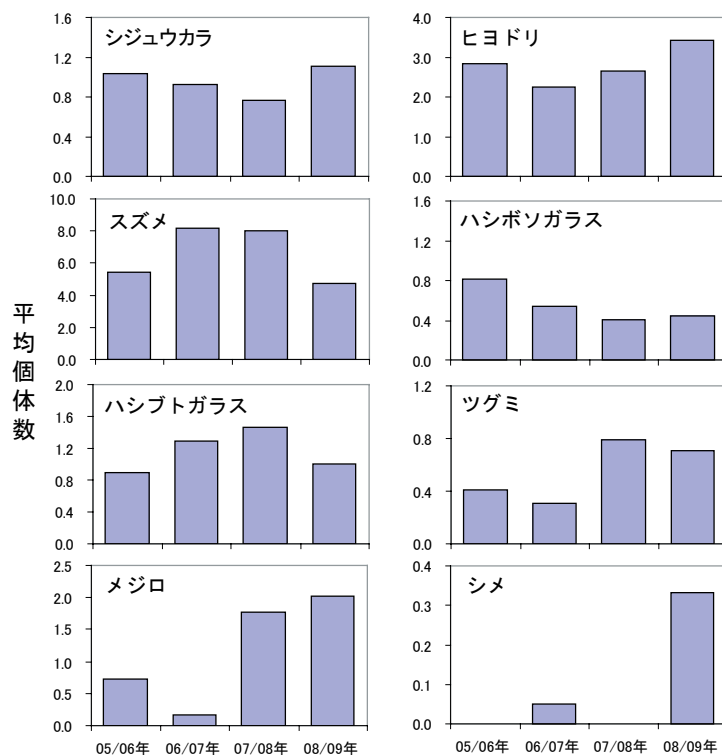


図5. 4年間継続して家での調査を実施した11か所における主な種の平均個体数の経年変化。各年の平均個体数は、各調査地の平均個体数を調査地数(11)で割って1か所あたりの平均で表している。

ましたが、家の調査でも2005年は少数しか記録されませんでした。したがって、2005年の個体数の少なさは、調査地の違いだけの問題ではないようです。しかも、2008年も減少しました。今冬の減少がたまたまなのか、それとも何か周期的な変動があるのか、来年以降が楽しみです。ハシボソガラスは2005年以降徐々に減少傾向が見てとれます。一方、面白いことに、ハシブトガラスは、2008年にはやや減少したものの次第に増加し、ハシボソガラスと反対の傾向を示しました。

一方、ツグミとメジロは2005年と2006年には少なく、2007年と2008年に多い傾向がありました。また、シメは、記録率と同様に個体数でも2008年は著しく多かったことがわかりました。

ただし、図4では年ごとの増減が明瞭に図示されていますが、個々の調査地のデータを詳しく見てみると、調査地によって増減にばらつきがあり、一部の調査地の大幅な変動によって、全体の個体数が引っ張られているものもあります。したがって、今回紹介した個体数の経年的な変化のいくつかは、調査地全体におよんだ一般的な出来事ではないと思われます。しかし、シメなどの冬鳥の個体数の変化は、家の周りの調査などでも同じ傾向が得られ、今冬の渡来状況を明確に表していると考えられます。さらに、メジロでは、各調査地の平均個体数をもとに、Wilcoxonの符号付順位検定を用いて危険率5%で比較して

ると、2006年以前と以後で有意に個体数が増加していることがわかりました。メジロは、昨年の夏の調査でも個体数が増加していたので、ともすると住宅地周辺を利用する個体が増加しているのかもしれませんが。これが、今後も個体数が多いままなのか、それとも一時的な増加なのか今後の調査が楽しみです。

## 最後に

以上のように、ベランダバードウォッチという身近な鳥の調査でも、年によって鳥たちの生息状況が多少異なっていることがわかりました。特に、今冬はツグミやシロハラ、アトリ、シメなどの冬鳥の記録率が高かったり個体数が多い傾向にありました。これは、暖冬による影響だったのでしょうか。暖冬のため、これらの冬鳥は遠くまで南下しないで関東地方など本州中部に留まったことで、記録率が高かったのかもしれません。こうした現象は、その年の気象条件や餌資源の多さなどによる一時的な変動と思われそうですが、地球温暖化が進むことで、今後次第に恒常化するようになることも考えられます。この調査を続けることで、これらの種の渡来状況の変化を明らかにし、気象条件との関係を明らかにすることができるかもしれません。

このように、ベランダバードウォッチは、私たちが普段鳥たちを観察していて何気なく感じていることを、ある程度明確に示してくれます。そして、この調査をとおして得られた結果を集約することで、自分のフィールドで観察されたことが、日本のほかの広い範囲で生じていることなのか、それとも自分の調査地など狭い範囲でたまたま生じたことなのかを教えてください。

ベランダバードウォッチは、まだ4年が経過しただけです。今回みられた変動が、一時的なものなのか、それとも今後の劇的な変化につながる序章なのかを知るには、さらに継続して調査を行なう必要があります。途中からでも、都合によって調査をできない月や年があっても結構ですので、一人でも多くの方のご協力をお願いいたします。塵も積もれば山となる、継続は力なりです。

最後に、2008年冬の調査に参加していただいた方々のご芳名を以下に記してお礼に代えさせていただきます。

新井陽子、荒川欽松、荒木廣治、有川章子、飯泉仁、猪飼幹太、生野満、石口富實枝、石原渉、石丸英輔、井灘志げ子、今森達也、植田明子、植田睦之、上原勇一郎、上山義之、内野恵、大塚啓子、勝股弘毅、加藤ゆき、金子はる子、川畑紘、吉家奈保美、木村雅世、久保祐子、黒田清恵、小荷田行男、小林俊子、小室智幸、斉藤けい子、齋藤映樹、坂田樹美、白石健一、白須文康、白田仁志、田中利彦、長嶋宏之、奈良真由美、花房ゆかり、平野敏明、廣瀬真名、藤原淳子、二村一男、古谷孝、堀江剛介、松岡昌代、三浦祝子、三田長久、三橋立、宮崎謙二、安田耕治、山崎智、山田昭光、山野敬二、吉邨隆資、渡辺美郎、渡部良樹、渡部晋子以上の58名（五十音順）の皆さん。

【取りまとめ：平野敏明】